博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　小松　久男　印

学位申請者：　ジャスル・ヒクマトラエフ

論　文　名：　20世紀初頭のトルキスタンにおける教育改革―ジャディード知識人の試み

【審査結果】

本論文はソ連解体後のウズベキスタンにおける教育改革への関心から出発して、その近代教育の始点ともいえる 20 世紀初頭の改革派すなわちジャディード知識人による教育改革の思想と実践を考察している。その結果、帝政ロシア統治下のトルキスタンにおいて、彼らは旧来の初等学校マクタブおよびロシア語・現地語学校の不備や限界を認識し、近代の条件に適合した次世代を育成するために新方式学校を開校する一方、新聞・雑誌の刊行、啓蒙的な戯曲の創作と上演、教育支援団体の結成を行ったこと、その背景には民族的なアイデンティティの生成とトルキスタン自治の構想があったことを明らかにした。本論文は、先行研究に目配りした上で、アラビア文字表記のウズベク語やロシア語などの一次史料を丹念に読み解きながら、サマルカンドのジャディード知識人ベフブーディーを中心として、20 世紀初頭の教育改革運動の展開を幅広く検討し、首尾一貫した議論を行うことに成功している。

このテーマはソ連末期のペレストロイカ以後、ようやく研究が可能となった新しいテーマであり、かつ中央アジアとりわけウズベキスタンの近代史を理解するには欠かすことのできない重要なテーマである。申請者はこれに果敢に取り組み、ウズベキスタン教育史に一つの見通しを与えている。

よって、審査委員会は、論文審査と最終試験（公開審査）の結果に基づき、全員一致で本論文は博士（学術）の学位にふさわしいと判断した。

2015 年 8 月 18 日に行われた最終試験（公開審査）には、本学の岡田昭人教授、鈴木義一教授、近藤信彰 AA 研教授、小松久男主査のほか、外部から新免康中央大学文学部教授が参加した。なお、最終試験はおよそ 2 時間にわたって行われた。

【論文の概要】

本論文は、本文（127 頁）、参考文献、参考資料（1913 年ベフブーディーの雑誌『アー

イナ（鏡）』に掲載された4つの論説の全訳）から構成される。全141頁。

本文の構成は以下の通りである。

序章　本論文の研究視角
第1章　20世紀初頭のトルキスタン
第2章　近代教育の展開
第3章　トルキスタンにおけるジャディード運動
第4章　ベフブーディーとムナッヴァル・カリの教育論
第5章　教育改革と社会問題をめぐる議論―人生儀礼
終章　民族名称問題とトルキスタン

序章では本論文の研究視角が述べられている。修士論文では現代ウズベキスタンの教育改革を扱った著者は、近代教育史の始点に関心をいだき、20世紀初頭のジャディード知識人による教育改革の思想と実践というテーマを着想したという。とくに注目しているのは、この時代に三種類の初等学校、すなわち伝統的な寺子屋式のマクタブ、ロシア側が開設したロシア語・現地語学校、そしてジャディード知識人の開設した新方式学校が並存していた理由とジャディード知識人の理念と目的である。続いて、関連する先行研究を帝政ロシア・ソ連期とペレストロイカ以降の二つの時期に分けて整理し、ウズベキスタン・ロシア以外に欧米や日本における研究についても言及している。最後に利用した史料について解説を加えている。主な史料は、ジャディード知識人の刊行した新聞・雑誌に掲載された論説、彼らが創作した戯曲作品、ウズベキスタン国立文書館所蔵のアルヒーフなどである。

第1章では、全体の背景説明として、19世紀半ば過ぎのロシアによる征服前後のトルキスタンの政治、社会、文化的な状況が説明される。ここではロシアの東洋学者ナリフキンやバルトリドらの著作に依拠して、ロシア統治下で鉄道、郵便、電信、銀行、綿花関連の工場など近代的な要素がもたらされ、経済発展が進んだことを述べると同時に、タタール人のジャーナリストで1907-1908年にトルキスタンを旅したアブデュルレシト・イブラヒムの旅行記などを引用して、ロシア人と現地のムスリムとの間には高い障壁があったことを指摘している。20世紀初頭の教育改革運動は、このようなロシアによる征服後の社会・文化的な変容を背景として生まれたことが示されている。

第2章では、まず旧来の初等学校マクタブと高等学院マドラサの実態をおもに同時代の観察記録から考察し、満足な読み書きも教えられないマクタブは時代の要請に応えられなくなっていたこと、マドラサもまた、イスラーム諸学にとどまらず、すでに世俗科目を取り入れていたヴォルガ・ウラル地方のマドラサに大きく後れを取っていたことを指摘する。次にロシア側が開設したロシア語・現地語学校を取り上げる。それは、ロシア式の初等学

校にムスリム・クラスを設け、アラビア文字の読み書きやイスラームの基本を教える機能も備えていたが、子弟のロシア化を恐れたムスリム住民は、ロシア側の努力にもかかわらず、ロシア語・現地語学校に子弟を送ることはほとんどなかったことを明らかにしている。最後に、このような状況の中で旧来のマクタブに比べて格段に優れた教育効果を発揮した新方式学校の創設者、イスマイル・ガスプリンスキーに焦点を合わせる。クリミア・タタール人の彼は、ロシア領内のムスリム地域でいち早く初等学校教育の改革に先鞭をつけたことで知られているが、コメニウスやペスタロッチの教育論の影響を受けたガスプリンスキーが、訪問先のトルキスタンで新方式学校の普及を訴え、現地のムスリム知識人に強い感化を与えたことが確認されている。

第３章ではトルキスタンにおけるジャディード運動すなわち教育改革運動の展開を考察している。新方式学校は、イスラームの基本を教えることを主体としながら、科目ごとの教科書や世俗科目を導入し、1905 年以降急速に増加した。それはまだ女子教育を含んではいなかったが、ジャディード知識人は、彼らの改革思想を広く社会に訴えるために戯曲を創作し、その上演・普及に努めたことが強調されている。しかし、この運動は一方ではムスリム保守派からの攻撃、他方ではロシア植民地当局からの抑圧に直面し、その展開はつねに圧力を蒙ったことを指摘する。続いて、指導的なジャディード知識人ベフブーディーの活動、なかでも彼が創刊した雑誌『アーイナ』について詳細な分析を加えている。ロシア領内やオスマン帝国を旅した彼の視野は広く、『アーイナ』もまた幅広いトピックを取り上げ（転載だが「日本における学生の日常生活」という記事もある）、啓蒙思想の普及に貢献したことが確認されている。

第４章では、サマルカンドのベフブーディーとタシュケントのムナッヴァル・カリという二人の指導的なジャディード知識人の教育論を比較している。ベフブーディーについては、トルキスタンで最初の近代戯曲となった作品『父殺し』のメッセージが、登場人物の語りから分析され、また論説「二つではなく四つの言語が必要なり」を例に、彼がテュルク（ウズベク）語、ペルシア語（の読み書き）、アラビア語に加えてロシア語の習得を呼びかけたことが指摘されている。ムナッヴァル・カリについては、彼が作成した読本教科書『第二の書き手』（1907 年）などを用いて彼の教育論を分析している。両者の考えには共通するところが多いが、ベフブーディーはかなり初期からトルキスタン自治の構想を胸に活動していたのに対して、ムナッヴァル・カリには教育家の側面が強かったことが、後の試問の際に指摘された。

第５章では、ジャディード知識人が社会問題として提起した人生儀礼（トイ）、すなわち割礼、結婚式、葬儀の際に費やされる法外な費用とそれがもたらす破滅的な結末に関するジャディード知識人の議論を分析している。ここではハジ・ムイーンの『割礼』（1914 年）、アブドゥッラ・カーディリーの『不幸な花婿』（1915 年）などの戯曲作品やベフブ

ーディーの「我々の希望もしくは願望」（1913年）などの関係する論説・記事を詳細に分析し、新方式学校の普及にとどまらないジャディード知識人の幅広い教育改革構想を浮き彫りにしている。彼らは人生儀礼のために無為に費やされる資金を教育改革にあて、そのための福祉団体の設立を呼びかけたのである。

終章では、トルキスタンのムスリム定住民の民族名称をめぐる問題とトルキスタン自治論を検討し、論文全体の総括を行っている。ロシア当局は現地のムスリム定住民をサルトと呼んだが、ベフブーディーらのジャディード知識人はこれに反発し、トルキスタン人という呼称がふさわしいと主張した。そこにはトルキスタンのムスリムを個別の民族に分けることなく、統合しようとする意図が見られるが、それを具体的に示すのが1905年ころからベフブーディーが抱いていたトルキスタン自治の構想である。ここでは彼の自治をめぐる言説が時系列で整理、分析されており、この自治構想が彼の教育改革運動の根底にあったことが指摘されている。最後の総括で本論の全体を締めくくり、ジャディード知識人の運動が現代ウズベキスタンの教育制度の基礎となったことを指摘している。

【論文の評価】

ペレストロイカ以降、ウズベキスタンではジャディード知識人の思想と運動については研究が進み、少なからぬ研究の蓄積がある。ただし、ソ連以来のアカデミー制度のために、その研究は文学研究と歴史研究に分かれる傾向があり、総合的な研究をむずかしくしていることは否めない。これに対して、著者は史料状況にも恵まれた日本で研究することによって、このような研究の分化からは自立しており、むしろ教育という分野から見渡すことによってバランスのとれた考察を行うことに成功している。

著者は、博士後期課程進学後にはじめてアラビア文字表記のウズベク語文献の読解に取り組み、精進の結果、『アーイナ』のように石版刷りの史料まで読む力を身につけ、その成果を見事に論文に反映させていることを高く評価したい。ベフブーディーらの著作は近年ウズベキスタンでも現代ウズベク語版として刊行されているが、そこにはときに削除や誤りが見られる。「ベフブーディーの真意を理解するには彼の著作のオリジナルを検討しなければならない」という指摘は実に正しい。

本論文のなかでもっとも独創性が発揮されているのは、第5章の社会問題としてのトイに関する議論である。これまで、トイに関するジャディード知識人の言説をここまで幅広く集めて検討した例はなく、その具体性とあいまって高い評価に値する。「コーランは我々にトイを命じたのか」とうたう詩人カーディリーの作品「トイ」（1915年）は、おそらく本論文ではじめて紹介されたものである。トイに要する莫大な出費は、現代ウズベキスタンでも大きな問題となっており、本論文はこの点からも意義を有している。なお、著者はトイを互酬の観点から考える必要も認識しており、今後の検討が期待される。

本論文は、20世紀初頭のジャディード知識人の教育改革の展開をベフブーディーを中心に考察し、その論旨は首尾一貫したものとなっている。そのさい、対象を教育に限定することなく、新聞・雑誌の刊行や社会的なテーマを扱った戯曲の創作、慈善団体の結成、民族名称をめぐる議論などに見られる民族的なアイデンティティの形成やトルキスタン自治の構想と関係づけて幅広く議論していることも評価に値する。加えて、誤字・脱字は多少あるものの、日本語の文章として読みやすいことも特記しておきたい。

次に、審査委員から出された主な質問やコメントは以下の通りである。

1.同時代の中国領内の新疆においてもテュルク系ムスリムの間に同様な動きが見られた。新疆では有力なムスリム資産家が教育改革運動を支援したことがあり、また民族的なアイデンティティの形成においてはさまざまなジレンマに直面していた。ロシア領のトルキスタンではどうだったのか。

2．先行研究の整理が羅列的で、これらと本論文との関係をもっと明確にすべきではないか。ベフブーディーが自治を着想したのは、いつ、どのような状況であったのか、また彼はロシアとの関係をどのように見ていたのか。彼はロシアを「祖国」とみなしているようだが。また、タシュケントやサマルカンドなど各都市を拠点に活動したジャディード知識人相互の関係は、どのようなものであったのか。

3．この時代はロシア自体でも国民教育はなお形成途上であり、ロシア領内のムスリム地域との比較によってトルキスタンの特徴を明らかにすることはできないか。ジャディード知識人は高等教育を通してのエリート養成についてどのような構想をもっていたのか、また各地のジャディード知識人をその方向性の観点からいくつかのグループ分けをすることは可能か。

4．政治・社会状況の変化に対応して彼らの思想にも変化が生じていたと考えられる。こうした動的な側面にも配慮する必要がある。ジャディード知識人の社会的な基盤はどこにあったのか。

5．本論文は現代ウズベキスタンの教育改革にどのような貢献をなすと考えられるか。本論文の内容からすると、トイに関する議論を含めて総括ではもっと言えることがないだろうか。また、教育改革を論じるときには、たえずこれを受ける側の条件や考え方を視野に収める必要がある。

これらの質問に対して、ジャスル・ヒクマトラエフ氏は、つねに明確で誠実な応答を行った。たとえば、先行研究との関係については、伝統的なマクタブに関するロシア側のかたよった評価をただし、また現代ウズベキスタンにおいてジャディード運動を民族独立運動として評価する傾向があるが、ベフブーディーらの著作を検討する限り、自治運動として理解する必要があるとの応答がなされた。これらはいずれも重要な観点であり、今後の

研鑽が期待される。総じて、口頭試問を通してジャスル・ヒクマトラエフ氏は、本論文の成果とこれからの課題について明確な認識をもっていることが確認された。

以上、論文の内容と最終試験の結果を総合的に判断して、審査委員会は全員一致で、上記の結論に達した。